書　評

Kolesnik, Walter B. *Educational Psychology*. New York. McGraw-Hill. 1963.

著者は University of Detroit の教授，この書は McGraw-Hill Catholic Series in Education の1冊である。著者はその序において，「本書は将来小学校及び中学校高等学校の教師たらんとしてカトリックの大学で学びつつある人達のために書かれた，その目的は彼等が学習者及び学習過程の理解を広くし深くすることによって有能な教師になることに資したいというにある。」と書いている。

私はかって，私の教育心理学に「特定の宗教，特定の世界観，特定の価値論が描く理想的人間像に近い人間形成を助けるための教育心理学というものが考えられるし，将来そういう旗幟鮮明な教育心理学がまとめられ成立することも可能であろう……」と書いておいたことがあるので，この書を手にした時，はじめには，さてはカトリック教育のための教育心理学が出たかと思ったのである。

しかしそれは少し早合点であった。もちろんこの著者は本書が，カトリック教育哲学に矛盾しないようには書いているが，生徒を道徳化したり改宗させようとする意図をもっては書いていないからである。但し心理学的な問題が，カトリック哲学や神学に触れる時には，心理学の知識と神学的哲学的概念とをうまく統合するよう助けるための心使いはしているのである。

著者は「この書は将来教師たらんとする者に実際に役立つことを念じて書かれた。教授達や心理学者のために書かれたのではなく，小学校や中学校高等学校の日常の仕事につくことを目指している若い人達のために書い

たものである」と言っているが，英語を国語として用いている米国について言えば，確かに著者の目的としたところはよく達せられていると思う。それは 21 章にわたって教育心理学の問題とすべき事実や原理を余すところなく網羅し，それらをわかり易く叙述しているからである。それならば日本人にとってはこの書はどんな意味をもっているであろうか。私はやはり上述の教育心理学の原理や事実を網羅していること，それらをわかり易い英語で叙述していることとが，この書物を日本の教育心理学の研究者にも学習者にも意味あるものとしていると思うのである。私自身が読んで教えられたことの二三を例示するならば，第2章に教育心理学における統計的概念を取扱っているところで，Critical Ratio から t 検定，F 検定，Chi 自乗までを1頁余りの中に理解させている点，第9章の学習過程を取扱っているところでは，Hull, Guthrie, Skinner, Lewin, Tolman 等の説がそれぞれどんな性質のものであり，それらが教室での実際にどのような意味をもっているかを，およそ1頁位宛で述べている点などである。各章の終りに Summary と Suggested Problems とか Questions for Discussion というのが置かれるのはアメリカの教科書の一般のやり方であるが，本書では Summary の次に Activities というのが置かれている。これも教室の実際に関係した仕事をさせる訳で知識の適用によって理解を地についたものにしようとしている。それに続く Supplementary Readings では選ばれた読物について5行位宛の解説がついている。これもわれわれを教えるところが多い。そして References の場合と同じくここには 1961 年刊行の書物までが選ばれている。例を第9章の学習過程にとると補充読物として解説されている書物は9種，その中の7種が 1950 年代のもの，他の2種が 1960 年のものと 1961 年のものとである。

この書について著者は「教育的保守主義」の立場を取るということも言う。但しそれはカトリシズムと混同されてはならないし，もちろん同一視することもできないものだと言う。その保守主義というのは，学校は本来児童青年の知的教養のためにあるものであって，彼等の社会化，情動の発

達，道徳性の発達そのもののために存在するものではない，知的発達以外の面はもちろん取扱われるが，それらは知的発達にかかわるものとの予想のもとになされているのだと言う。この主張ははっきりしている。但し現代の教育心理学はかような保守主義のみによっては現在あるようにすなわち著者 Kolesnik が取扱ったように豊富なものとはなり得なかったであろう。著者の哲学とは異るプラグマテイズムの功績を著者は認めなければいけない。その成果を取入れて彼は彼の哲学による統合をなしたものというべきであろう。プラグマテイズムの功績故にこの書はカトリックの者にもカトリックならぬものにも共に有用なものとなっていると評者たる私は考えるのである。 （岡部弥太郎）

Bennett, Bargaret E. *Guidance and Counseling in Groups*. New York. McGraw-Hill. 1963.

Both the classroom teacher as well as the Guidance Director, will find this a very useful book. The author convinces the reader that group guidance is being given a real place as an essential function of the personnel program, but that group and individual procedures are complementary aspects of the program.

The review of the sources of the group approach in guidance is excellent, concluding with a comprehensive statement of the aims and objectives of General Education. An analysis of the common problems in living is especially helpful in that reports of various age group problems are cited. Guidance workers often fail to realize the-wide scope of the basis of problems, and the author reports several research findings as to age-level trends, emphasizing the methods which may be employed in exploring these problems.

Group leaders will find the discussion of the effects of participatory versus supervisory leadership on group judgment, stimulating.